『ネコ科大型肉食獣の教科書』

秋山知伸 著

2016年10月　雷鳥社 発行

定価（本体1,600円＋税）

吉岡美帆・浅川満彦（酪農学園大学獣医学群）

動物(宿主)は猛獣を対象にしたいという。えっ！ モウジュウ？ 小学校の授業で観た映画『マルガ』かサーカスの猛獣使いの世界を彷彿とさせる語だが，明確な分類群が全く思い浮かばない。近い所で，トラ好きゼミ生を相手にしたことがあるが，結局，群馬サファリの先生方に卒論(橋本ら，2015)のお世話を頂き，プロ(現在，周南市徳山動物園）になった。かくの如く学生は確実に成長する。ならば，教える側もこういった漠とした学生の要望も，教員自身が脱皮する機会と受けとめ（泣），カタチにしないと。

で，「猛獣」だが，『広辞苑 第3版』に「肉食の，性質が荒々しい獣」とあった。一方，その前々頁の「猛禽」には「性質が荒い肉食の鳥」と，まず，同じような定義が現出したが（でも，表現をちょっと変えているところが，さすが岩波！），その直後に「ー・るい【猛禽類】ワシタカ目とフクロウ目との総称」と続き，さらに嘴や爪などの形態や食性などの生態に言及，末尾は「ワシ・タカ・トビ・コンドル・フクロウなど」と結んでいた。「この扱いの違い！ ここを編んだのは相当な愛鳥家だな（とニヤリ)」。いやいや，そんな想像を楽しんでいる暇はない。たった2年で卒論を完成させないとならない切実な話。『広辞苑』に見放されたら直感だ。ジャングル活劇やサーカスでの猛獣と言えば，ライオン。ならば，その親戚筋のグループの把握は必須。以上のようなことで，件ゼミ生新人に本書を読んで貰うことにした（何しろ題名に「教科書」とあるし)。まず，彼女から約5か月たって提出された「感想」を掲げる。　（浅川 文責）

この本は大型ネコ科動物の野生の姿を見るために奮闘する日々を綴った日記のような本である。この本を読んで，著者の動物への愛がとても伝わってきた。ガイドを雇い，各国の国立公園を周り，ネコ科の肉食獣以外にも様々な野生動物を追いかけている記述は迫力あるものだった。しかし，著者とは異なり，安易な気持ちで野生動物を見ている者も少なくない。私（吉岡）はそういう方々にいかにこの動物達の素晴らしさや面白さを伝えることができるかが，重要になるのではないかと思っている。この生態系のヒエラルキーのトップに立っているのがヒトであるため，世の中はすべて人間を中心に回っている。そのためにヒトの妨げとなるものは，簡単に排除されてしまう。そんなことをすればゆくゆくはヒトが苦しむだけであるのにと思うが，環境や自然に興味のない方には知りもしれないことである。

そこで大きな力を動かす富裕層の方々の眼中にどう入れるかが重要となって来るであろう。ただ事実を述べるだけではなかなか効果がありそうにもないので，他に工夫が必要なのであろうが，今は具体的方策が思い浮かばない。少なくとも，観光客が落とすお金だけで保護区を運営するという枠組みには違和感をおぼえる。

最後のパートでユキヒョウと現地の方たちとの共存について具体的な支援について記述されていた。著者のように豊富な知識や経験があっても，日々遭遇する難問には頭を悩ましていたことに驚いた。現地に行って初めて分かること，感じることの大切さを感じ取った。　（吉岡 文責）

上質な紙（手触りが異なる）に印刷された大型ネコ類などカラー写真が，冒頭と末尾に数ページにわたって束ねられていたので，いやが上にも目立つ。だが，初見では地味な印象をうけるかもしれない。しかし，悪戦苦闘をした日々を綴った寄稿文を読み込んだ後，これら作品（特に，ユキヒョウ）と対峙すると，見方が全く異なった。この編纂上の計算も著者が仕組んでいたとしたら，著者は相当な策士であるに違いない。そう，本書は，基本的に大型ネコ類（トラ，ユキヒョウ，チーター，ライオン，ヒョウ，ジャガー，ウンピョウ）の撮影紀行文の体裁をなしていた。合間に，これら種に関しての問答集が挟まれ，幅広い年齢層にも抵抗なく読んで貰うことを意図している。

しかし，そのような配慮からか（高尚な印象を削げ落とすためか)，引用文献表が無いのは(少なくとも，評者には)困った。特に，DNAによる系統分類の数多ある最新知見から，著者が厳選した文献情報は欲しい。たとえば，ボルネオ島およびスマトラ島産ウンピョウ（別種スンダウンピョウ）が大陸半島部のそれとは系統がかなり異なっていることは，評者がインドネシアの研究者と一緒に仕事をすることが多いので気になった（同時に，本書で詳述された彼の島におけるトラやヒョウの最近の絶滅史に関し，心を痛めた)。また，ウンピョウが *Felis* 属と *Panthera* 属の中間的系統であること，チーターがピューマ（＝アメリカライオンあるいはクーガ。今は別属 *Puma* としているが，ちょっと前まで *Felis* 属）に系統的に近いこと（そうなると，チーターは大型ネコ類ではなくなる？ あるいは，ピューマも大型ネコ類になる？)，ジャガー

の食性が自身よりも小さいサイズの動物を捕食すること（本書によると，そのためにヒトは襲わないこと，ジャガーはサイズの小さい獲物の頭部を潰す方法で仕留め，ライオンのような頸部に食らいついて窒息させる様式ではないこと）など，さっそく，野生動物学の授業で使わせて頂きたい情報が詰まっていたのだ。

いや，野生動物学ばかりではない。著者ご自身が苦しんだ「熱帯性マラリア」の症状記載は，とても迫力があり，確実に寄生虫病学の授業でも参考になる。それに，問答集「Qトラの大好物ってなんですか？」に，シベリア産はイノシシを食べるとの回答。さもありなん。*Paragonimus* 属肺吸虫はトラでよく見つかる（待機宿主がイノシシ）。ウガンダにおける JICA 草の根による活動についても言及されていたので，海外青年協力隊を志向するものも必読である。もちろん，野生動物医学を基盤に研究・教育をする本ゼミの新人にとって，手軽な入門書としても推奨したい。ただし，うちのゼミは忙しいので（他にも読まないとならない文献があるので），この学生のように何か月もかけてはいけない。

（浅川 文責）

文　献

橋本千尋, 山本達也, 斉藤恵理子, 吉野智生, 外平友佳理, 川上茂久, 浅川満彦. 2015. サファリパークで飼育されたネコ科動物の糞便を用いた寄生虫保有状況調査. 日本野生動物医学会, 20: 47-49.

註　冒頭の映画『マルガ』については岩波書店の寺田寅彦随筆集を参照されたい。この映画を評者（浅川）が小学校2，3年生の頃（1966年前後），山梨県韮崎小学校の授業の一環で観た。正直，寺田が感動した猛獣の闘いのことはあまり憶えていない。一方，アフリアゾウ鼻腫瘤部を切開したシーンで，その場所から大量のムシ（おそらく回虫類 *Ascaris lonchoptera* で，本来の寄生部位の小腸から離れ，鼻腔内で停滞）が流れ出て来たのは鮮明に記憶している。